



人にも世にも光明よ  
みひかり  
熙らしてあまねく満ちわたれ



## 信 心 の お 唱え

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長 柴田弘一

今年の全国奉詠大会で、強く印象に残ったことのひとつに、真言宗金剛流金剛講員七十名による登壇奉詠があげられます。

それは第二日目の最終十五番目の登壇でありました。黒紋付きに輪袈裟を着け、肅々と登壇するさまは一種の威厳を感じさせました。お唱えする声は凜として会場を圧し、打つ鉦と振り鳴らす鈴の音は一糸乱れず、全く整然且つ厳かに奉詠が進行してゆきました。

会場はその奉詠にくぎ付けにされました。

奉詠が終ったときには、感嘆まじりのどよめきとともに満場わかれんばかりの拍手に包まれました。

一体この莊嚴さはどこから来るのだろうか、と師範さん方と話合いました。

それは、ここ（三重県サンアリーナ）に来るために猛練習されたに違いないけれど、やはりお唱えする方々の「信心」と言うか「信仰心」から発するものだからではないだろうか、との見解に、それぞれうなづけたことでした。

秋田の方々は第二日目の参加でしたので、その場面に会えましたが、何かしら感じ取って来られたのではないでしょうか。

他の流派の詠讃歌を見聞する機会は今まで皆無に等しく、この度金剛講の奉詠と出会えたことは、これから梅花流の進む方向をも示唆しているようにも受けとめました。

ありがとうございます。

（秋田市 東泉寺）



協和町・太寧寺 伊藤道人師範

ひやませかきかき！ 新米先生たちの研修会

## 宗務所講師実演研修

森吉町・淨福寺 奥山芳寿

禅センターの梅花講習等でおなじみの「梅花流宗務所講師」さんたち。自分たちの勉強もそれなりにいっしょけんめいです。今回はそんな若手先生たちが、ベテラン師範や詠範さんたちの前で、“いつもの檀信徒講習”をご披露。言ってみれば教育実習生の研究授業みたいなのですが、これがなかなかたいへん。なみいるお歴々を目の前に、キンチヨーの時間がありました。受講者役として参加の奥山老師よりご報告です。



合川町・太平寺 鎧谷隆道師範

秋田県宗務所に禅センターが開設されて十三年になりますが、以来、宗務所の事業、活動が活発となり、布教部、研修部、それに梅花部と、それぞれの担当部門で年中行事をこなしております。

特に一般檀信徒を対象とする布教部の「仏教入門講座」とならんで、梅花部の一般講習会は、参加受講者も多い。

今年度も九回の講習会を予定され、宗務所講師の師範も懸命に任に当たっております。

去る七月二・三日と「宗務所講師等一泊研修会・検定委員研修会」が開催されました。

一日目午前は、柴田弘一師範老師を講師に「初心者への指導法について」と題し、ご指導を賜りました。



井川町・秉江院 佐藤晃心師範

午後は、「宗務所講師等による講習実演」。宗務所講師（宗務所管内師範）の中より、今回は五人の師範（写真の五人です）による講習の実演研修。

それぞれ課題曲が与えられ、新锐から熟練者まで、師範・詠範を前に緊張しながら、または堂々と、日頃の講習法を披露！

参加者全員より、感想、注意点などを用紙に記載され、実演者に渡さずして事項を再検討しました。

二日目は「検定委員研修」で、宗務所梅花主事老師、柴田師範老師を中心には、平成十六年度の検定内容を検討され、同時に今までの申しあわせ事項を再検討しました。



庵巣町・龍泉寺 佐藤俊晃師範



本荘市・長谷寺 浅田高明師範

れる。

特に、講師の柴田師範より、そのつど丁寧にご指導を受け、講習法を研鑽しました。

与えられた三十分钟以内に、詠唱の留意点の説明から歌詞解説と、色々講習内容は違いますが、熟練者になると、一般檀信徒講員対象ではなく、指導者向けの講習かと思われる高尚な実演もあり、真剣に聞き入る場もありました。



'お誓い'は花輪・長年寺梅花講の村田ユキさん(93歳)

今年もまた泥沼の中に蓮の花がやさしいつぼみをつけてくれました。身心の浄化を求めて梅花講に入らせていただいてから早くも十一年目となり、この度県北梅花奉詠大会に参加させていただきました。初めての大会も花輪であり、梅花流一泊研修とか、花輪大会など何度も足を運び心洗われる思いがしたあの頃がなつかしく心によみがえる参加となりました。

まわりが漆黒の闇に包まれ、おごそかな雰囲気の中で全員による三宝御和讃。「心の闇を照らします・」大唱和の中をしづしづとお進みになる導師上殿のお姿に、暗やみに明るい光がさしこみ輝きました。

関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

暗い世相で、哀しいニュースの続く中で、我が身を清め、心を鎮めることのできる同行同修の集いに参加させていただいたしあわせをしみじみ感じました。

花輪・長年寺梅花講の村田ユキさん(93歳)

(玉鳳院・善徳寺・福寿院・長徳寺)(能代山本地区)四ヶ寺の講員さんが、心を一つにして唱和できたことが、すがすがしい思い出となりました。

(玉鳳院・善徳寺・福寿院・長徳寺)(能代山本地区)四ヶ寺の講員さんが、心を一つにして唱和できたことが、すがすがしい思い出となりました。

**梅花の集い**

# 登壇奉詠

## の感動

850人が参加!

7月7日開催  
鹿角市スポーツセンター

ニッ井町 長徳寺梅花講員

工藤志づ子

むし暑い日が続いておりますが、ついつぼみをつけてくれました。

せせていただいてから早くも

十一年目となり、この度県

北梅花奉詠大会に参加させ

ていただきました。初めて

の大会も花輪であり、梅花

流一泊研修とか、花輪大会

など何度も足を運び心洗わ

れる思いがしたあの頃がな

つかしく心によみがえる参

加となりました。

まわりが漆黒の闇に包ま

れ、おごそかな雰囲気の中

で全員による三宝御和讃。

「心の闇を照らします・」

大唱和の中をしづしづとお

進みになる導師上殿のお姿

に、暗やみに明るい光がさ

しこみ輝きました。

# 県北梅花流奉詠大会



九十三歳になられたという長年寺の講員様のお誓いの言葉には朗々とした張りがあり、身のこなしにも少しも高齢を感じさせないお姿に、私は強く胸を打たれました。

私達の盂蘭盆会御和讃の唱和が近くにつれ、どきどき胸の鼓動を感じました。

同じ講員の佐藤さんが急に、「オレ壇に上がるればいいがや、どうしたらえがやオレ歳も歳だし」と言い出しましたので、「みんなと一緒にだから丈夫だよ、元気を出して」と励まし、手を引きいたわりながらの登壇となりました。緊張のあまり手がふるえて教典のページをめくることもままならないようでした。

丈夫だよ、元気を出して」と励まし、手を引きいたわりながらの登壇となりました。緊張のあまり手がふるえて教典のページをめくることもままならないようでした。

太祖影向・伝光一

達磨大師御和讃

廓然

香華

達磨大師御和讃

太祖影向・伝光一

總持二祖讃仰御和讃

永光(總持二祖)

渙声(永平一)

渙声(總持二)

太祖誕生御和讃

報謝御和讃

成道御和讃

六日

三日

七日

十日

二〇日

二五日

二八日

二九日

二〇日

二二日

二三日

二四日

二五日

二六日

二七日

二八日

二九日

八月

七日 戰災精靈供養御和讃

四日 孟蘭盆会御和讃

二日 地藏菩薩御和讃

八日 慈念

九月

四日 正法御和讃

一日 追善供養御和讃

香華

開山忌御和讃

十一月

二日 太祖影向・伝光一

達磨大師御和讃

廓然

香華

達磨大師御和讃

太祖影向・伝光一

總持二祖讃仰御和讃

永光(總持二祖)

渙声(永平一)

渙声(總持二)

太祖誕生御和讃

報謝御和讃

成道御和讃

六日

三日

七日

十日

二〇日

お問い合わせ 東泉寺(018-873-7676)  
毎週土曜日更新

梅花のふるさと

—詠讃歌の生まれた風景〈その二〉—

# 達磨大師ゆかりの禅寺

しょうりんじ  
少林寺

達磨大師御和讃

面壁九年の少林寺  
瑠璃紺青の中空に

月影まだかにかかりたり

北斗の星座はきらめきて  
坐禅の世界を深めゆく  
降りつむ深雪は幾尺か  
左の臂を断らはなしまことを示せし法の庭  
求法の慧可を受けとめて  
仏心印を伝えましけり

作詞 赤松月船

■海を越えてきた達磨大師■

三年間、はるばる海を越えてやつて來た。インドの小国とは言え、もとは皇太子である。世界中のどの財宝よりも心の徳こそ価値があるという、

以上は禅宗でよく知られた話。史実というよりは伝説に近い。なぜ武帝と達磨はかみあわなかつたのか、達磨の真意はなんだつたのか。修行僧にとってそれが問題と、古来、有名な公案（さとりにいたための課題）として伝えられてきた。

『達磨大師御和讃』はこの伝承をふまえて作詞

■慧可との出逢い■

かの教えに出逢った喜びを、東の國へ伝えようとやつて來た。達磨大師、その人のことである。

時に梁（昔の中国の一国）の天子は武帝。仏教護持の徳行篤きことで知られる武帝は、渡來の僧・達磨大師を待ちかねたようだ殿裡へ招いた。

武帝「どういうところが聖なる真理の第一のところというのか」

達磨「聖なるものなどどこにもない」

武帝「わしの前にいるそなたは誰だ」

達磨「知らぬ（不識）」

武帝は取りつくしまもない。

達磨はすぐさま揚子江を渡り、少林寺に行つて九年の間、壁に向かつて坐禅した。

されている。  
少林寺で面壁を続ける達磨大師。昼夜ぶつ通しの坐禅修行。月は夜空高く輝き、天河から離れた北斗七星が山の端まで垂れかかるようなきらめく夜。達磨大師の坐禅はますます冴え渡る。そんな歳月を重ねる達磨大師のもとへ、中国各地から入門を求めて修行者達が続々と訪れる。しかし、ものほしげな顔した中途半端な気持ちの輩に達磨は見向きもしない。そこについに慧可と名のる修行僧がやつて來た。

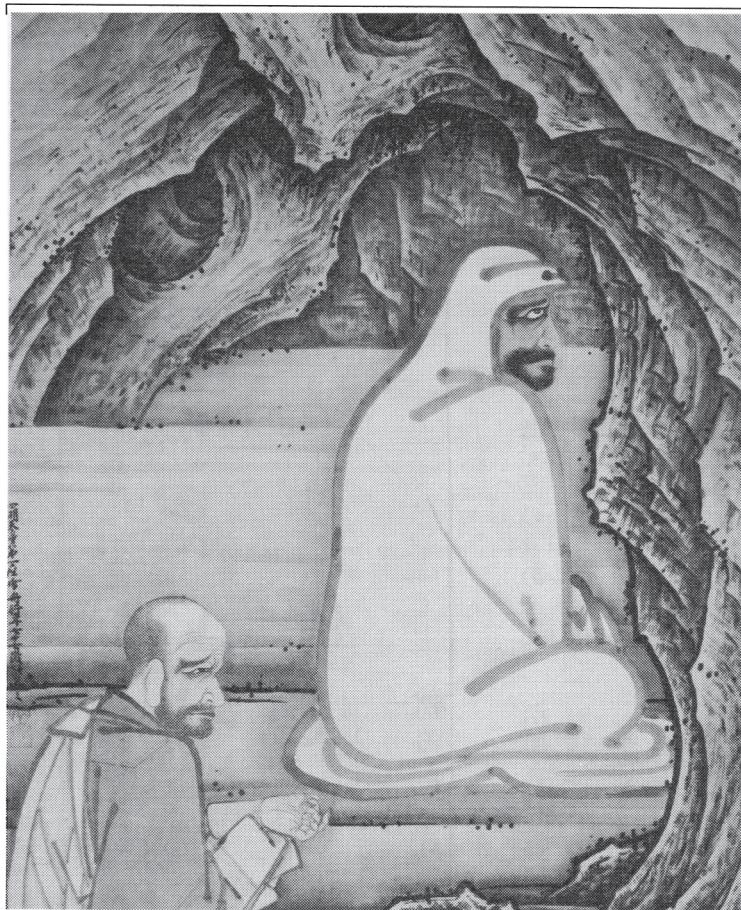
時は十二月九日。凍てつく空から雪が舞い落ちる。教えを乞う慧可に、達磨はがんとして入室を許さない。戸外に立ちつくす慧可とそのまわりを見向きもしない。そこについに慧可と名のる修行僧がやつて來た。



雪が白く染めてゆく。

夜の闇があたりに満ちてくる。鋭い寒気が骨に徹し、ほほをつたう慧可の涙が氷となつて顔に張りつく。腰まで雪に埋もれる頃には夜が明けていた。

慧可はひそかに思った「昔の求道の人々は、骨をたき割つて髓を取り、血を出しては飢えを救い、崖から身を投げては腹を空かせた虎にその身を喰らわせた。私は何者だ。私に出来ないはずはない」と。そう志をはげましてひたすらに直立不



**【慧可断臂図・雪舟筆】**面壁のまま無言で背を向けている達磨に対し、意を決し自らの左腕を切りはなした慧可が、その腕をさしいだしている場面。

日本屈指の水墨画の名手・雪舟による、迫真的緊張感がみなぎる名作である。

動の姿勢を保つた。

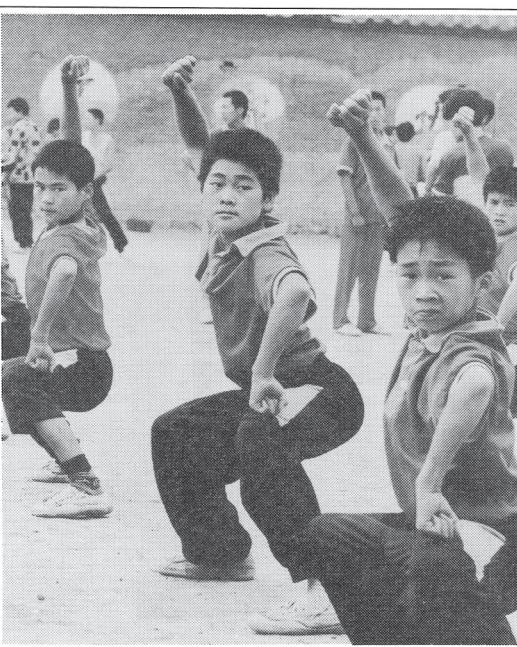
達磨が問う「そうやつて君はいつたい何を求めているのかね」。慧可「ただ和尚さまの慈悲をいたして世の人をお救いしたいと願うものです」。

達磨「もうもろの仏の無上の道でさえ、果てしない時間の難行苦行をへてはじめて成就するのだ。小智小徳軽心慢心ではとうてい望むべくもない」。こう言って達磨は二度と取りあおうとしない。

ここに至つて慧可は、いよいよ求法の思い高まり、鋭利な刀を振つて左腕を切り落とした。必死の形相とともに差し出す血まみれの左手を見て、達磨はその真意を認め、入門することを許し、やがて仏法の大要を慧可に伝えた。和讃にある「仏心印」とは、釈迦如来に直結する仏法の大要、達磨大師の教えそのものにほかならない。

『宗歌』や『正法御和讃』でおなじみの「雪の夕べに臂を断ち」も、この場面を伝えるものである。

「慧可断臂」と呼ばれるエピソード。史実かどうかなどという、こざかしい詮索はここでは無縁。古今の禅僧達の求道の志氣を、この因縁が支えてきたのである。



【少林寺周辺で武術修行に励む少年たち】

カンフーブームの影響だろうか。現代の少林寺周辺は武術専門学校が多く、中国全土から武芸の奥義をきわめようと少年たちが集い、日夜修行に明け暮れている。

少林寺は河南省嵩山の西麓に位置しています。

かつて、少林寺の僧徒達が少林拳によつて唐の太祖の天下統一を助勢したと伝えられ、またカンフー映画等の影響もあって、中国武術のメツカとなつています。伽藍内の石畳には数多くのくぼみがあり、現地ガイドの話では、いにしえの僧徒達の修練の名残だとか・・・。やや武道の寺という色合いの濃い少林寺ですが、歴代住職の墓塔が林立する塔林へ足を運ぶといかにも仏教の古刹という風情があります。

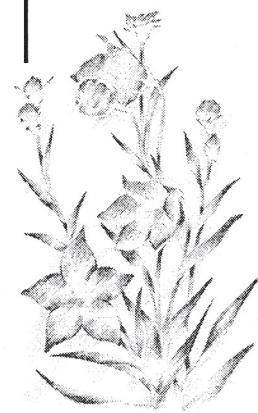
嵩山の西方には、中国で最初に創建された仏教寺院・白馬寺や、中国三大石窟のひとつ龍門石窟のある、古都・洛陽が位置し、古代中国の息吹を訪ねる最適のコースをたどることができます。

梅  
花  
つ  
れ  
づ  
れ

# 五葉会の思い出

## — 友を偲んで —

秋田市 林清寺寺族 松山畦子



ちよつじぶじよほう

人の此のせの夢々は冥路に急ぐ露の身の・・  
木の香りも新しい勝平寺様の広い法堂に同寺梅花講の皆様のお唱えする無常御和讃が静かに流れています。

六月十七日は、去る五日ご逝去された勝平寺様寺族高柳フミ様のご葬儀でした。

法堂の中央に飾られた遺影は、お孫様の入学祝いの時の写真ということで、心から楽しんでいるあの温かい笑顔でした。

また、去る五月二十日、上京中の私の携帯電話に西来院様の寺族田中琴詠範様の訃報があり、五月二十五日葬儀に参列し、講員の皆様と追弔御和讃をお唱えいたしました。

葬儀の終った日の夜行列車で、三重県で行われる全国奉詠大会へと向かいました。

思えば、昨年の大館樹海ドームで開催された第五十一回全国奉詠大会には、お二方も講員さんを

花講の皆様のお唱えする無常御和讃が静かに流れています。

特に西来院様は、一昨年武道館で開かれた五十年記念奉詠大会に参加され、伊豆温泉郷での一泊をご一緒に楽しみました。

お二人はいつも研修会や講習会には進んで参加され、西来院様はいつも優しい笑顔で接してくださいました。わずか二十日間の間に五葉会のお仲間がお二人、早すぎる旅立ちをされ、無常の風の冷たさに、悲しみをこらえるのがやっとでした。

昭和五十五年、寺族相互の和を図り、和讃を通して、和が大きな輪となるよう願いを込めて、第一教区の寺族十一名と他教区の寺族様も入って五葉会をつくりました。

詠讃歌のお稽古は、妙覚寺様や鱗勝院様を会場

## ②シユモクの柄はほぼ垂直に、鉢面の約二センチ上にがざす



## ①空鉢とは「恭敬」の表現です

恭敬とは「つつしみ敬う」と。紫雲一仏両祖の「南無大恩教主」「南無釈迦如來」「南無道元禪師」「南無瑩山禪師」等、とくに尊敬の念を表す個所でこの所作を行います。

## 写真で見る基本作法

故高柳フミ様（勝平寺）



故田中琴様（西来院）



今も耳元に残っています。ときどき、「涌き出するその源の深きほど・・・」と口をついて出ています。

後年、教区の各方丈様のご理解をいただき、秋田市内にただ一講だけだつた梅花講も九講増えて十講になりました。今、事情があつて休講なさっているところもありますが、機会があれば復講なさると思います。

逝かれたお二人の遺志を汲み、私達五葉会の会員も悲しみを乗り越えて、講員の皆様とともに、一人でも多くの方々に梅花を唱える喜びと、信仰の深まりにつながる梅花の輪を広げていきたいと思います。

伝えまし 受け継ぎ來たり有難や

五葉に聞く 道のひとすじ

合掌

にお借りして、講師は東泉寺住職柴田弘一先生をお願いいたしました。多忙な柴田先生は、私達のために時間をさいてくださいり、懇切丁寧にご指導して下さいました。毎回、それはそれは楽しい半日で、次回が待ち遠しいくらいでした。

五葉会の名称は柴田先生が付けてくださいました。梅花讚の中の一節に、「一つの花の花びらは五つに清く開かれて・・・」とあり、これが由来とのお話をでした。

発足当時、補教の検定のために、教区長宅に講員登録し、金浦の大会ではじめて受検しました。受検の時はたいへん緊張した思い出があります。

また大会では寺族のみで、三宝御和讚を奉詠しましたが、緊張のあまり、次第に速くなり赤面した記憶が残っています。

本荘の村岡旅館を会場にした大会では、今は亡き大館市・本宮寺の佐藤広俊師範様より「ましみず」を口伝していただき、あの朗々としたお声が

今年に入つて梅花を続けてこられた方丈様、お寺の奥様の計報が相次ぎました。  
ニツ井町梅林寺東堂木村正則老師（老師とともに合川町正法院様で五級師範の検定に臨んだ記憶があります）、秋田市寺内西来院の田中琴様、秋田市勝平寺の高柳フミ様、そして比内町全應寺の佐藤サト様のご逝去。心より各氏のご冥福をお祈り申上げます。

ここに田中琴様、高柳フミ様と親しかつた本会員、松山畦子様より追悼の文章をいただきましたのでご紹介いたします。

師範・詠範の会会長 柴田弘一

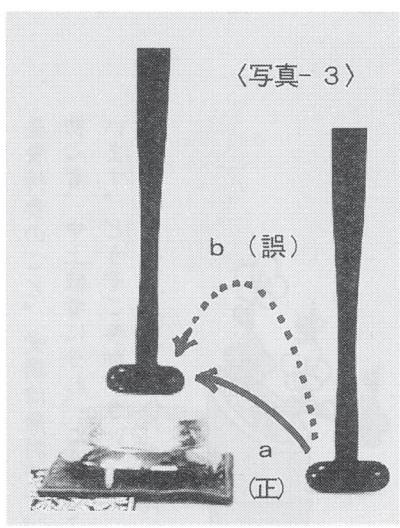
### ③鉢面上までのシコモウの動き方

定位位置についた状態から、鉢面の約二センチ上へと、シユモク頭がごく自然に移動しますa。いつたん上方へ引き上げて、上から鉢面上に押しつけるような動きとならないようにしましようb（写真-3）。



（写真-2）

シユモクの柄をななめにして  
シユモク頭だけを鉢面上にかざすのではありません



（写真-3）

まちがい

面にかざすのではありません（写真-2）

